

長期化するネパールの ブータン難民



ブータン難民が生まれた背景

日本ではあまり知られていませんが、1990年代初頭に、民主化運動や民族主義政策により、ブータンから逃れてきたネパール系ブータン難民約10万6000人が、ネパール南東部の7つのキャンプに避難し生活しています。

19世紀後半から20世紀初めに、経済的な理由から多くの人々がネパールからブータン南部に移住しました。しかし、低地に住むネパール系の人々は、ネパール語を話しヒンズー教徒中心であるのに対し、中高地に住む主流派ブータン人は、チベット系の仏教徒です。そもそも民族的にも宗教的にも異なります。

1980年代末から1990年代初頭に、ブータン政府によるネパール系の人々の国籍剥奪や民主化要求をめぐる対立などから大量の人々がネパールに避難しました。この結果、ネパール政府の要請を受けて、ユースエイチシーアール UNHCR が政府を支援する形でブータン

難民の保護と物的支援に携わるようになりました。

2006年2月より、7つの難民キャンプを管轄しているUNHCRネパール・ダマク事務所に所長として赴任している根本かおるさんに、キャンプの現在の様子についてお聞きしました。

難民キャンプに明かりを

難民たちの住むキャンプには、そもそも電気が通っていません。昨年未まではかなりの量の灯油を配布していたので、夜でも明かりをとることができたのですが、灯油の値が高騰し、今では家族あたり月1リットルしか配っていません。その結果、夜、明かりがないため子どもたちが家で勉強できなくなった上、暗闇に難民たちが身の危険を感じ始めました。難民となった子どもたちにとって教育はしばしば心の安定剤の役割を果たしますが、勉強の機会を奪われた子どもたちはますますフラストレーションを募らせています。

唯一の太陽光発電パネルが難民キャンプ内の診療所で大活躍しています。夜の急患への対応には、以前は灯油をともしていたのですが、今では太陽光パネルの電気が明かりをともしてくれます。灯油の明かりよりも明るいので治療や分娩補



「難民キャンプ内の診療所と太陽光発電パネル」
©UNHCR/S.Doraiswamy

助をするにも助かると医療スタッフたちは喜んでいますが。難民キャンプの診療所は周囲に住む地元住民たちにも開放されているので、彼らも恩恵に浴しています。

キャンプ内の安全のためにも、子どもたちが夜集まって勉強する場所を提供するためにも、太陽光発電パネルをもっと設置することができれば、かなり助かるだろうと思います。

(参考：太陽光発電パネルを現地調達した場合、1基約400米ドル=約4万6000円)

今日の希望、明日への希望

難民の約半数が女性です。女手ひとつで家族を支えているケースや、老夫婦、障害者を抱えた家族など、援助物資の削減が大きく影響する層もあります。5～10万円という額で測り知れない効果がある支援が実施できるのですが、緊縮財政のためにそれができなくなっているのが現状です。

将来の故郷への帰還を含め将来の解決に向けて、職業訓練の実施は難民となった人たちの明日への希望につながります。女性には洋裁や刺繍、機織りなど、男性には鍛冶や自転車修理などの職業訓練が実施されていますが、まだごく一部の人たちしか受けられていません。今後支援を強化していきたい分野のひとつです。

*ご支援は「ブータン難民」とご指定ください。

昨年、タイ政府はミャンマー難民の第三国への定住を認めるようになりましたが、多くの難民にとっては、祖国ミャンマーにいつ帰れるのか見通しのない状況がまだまだ続きます。

多くの日本人が訪問するタイに、14万人のミャンマー難民が困難な状況にあるということを日本の人々に知っていただき、難民の人々の苦難を和らげ、将来への希望をもって生きていけるよう皆様からのご支援をお願い申し上げます。

*ご支援は「ミャンマー難民」とご指定ください。

タイにいる14万人のミャンマー難民

子どもたちに希望を!

ミャンマーにおけるビルマ族とカレン族などとの紛争が、1949年以来57年間続いており、1984年にミャンマー難民がタイに流入し22年になります。タイ国内のミャンマーとの国境近くにある9カ所の難民キャンプに約14万人の人々が、山の斜面に沿った厳しい立地条件の中、竹で作られた高床式の家が軒を連ねて懸命に生きています。現在も多くの難民が流入しており、水の確保・衛生状況は厳しくなっています。ユースエイチシーアール UNHCR は、タイ政府、キャンプ委員会、NGOと協力して、食糧、水、衛生・医療、教育、安全など難民の保護と援助をしています。難民の人々は、

キャンプの外へ出ることも仕事をする自由もありません。

紛争を逃れてキャンプにたどりついた子どもたち、キャンプで生まれた子どもたちが、キャンプだけの世界で生活しています。自由のないキャンプの子どもたちは、知識に飢えており、教室や教材、先生が不足しているものの学ぶ意欲に溢れています。中学生に将来の夢を聞くと、女子は教師や看護婦、男子はサッカー選手、ミュージシャン、コンピュータ技術者と答え、「いつか故国に戻り、ここで学んだことを活かしたい」と、将来への夢や希望となる「教育」の必要性を口々に訴えていました。

認定NPO法人 日本UNHCR協会
[国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)国内委員会]
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70
国連大学ビル(UNハウス)6F
TEL: 03-3499-2450 FAX: 03-3499-2273
Eメール: info@japanforunhcr.org
ホームページ: <http://www.japanforunhcr.org>

「With you」No.9 2006年 第2号(6月)
発行人: 赤野間征盛
編集: 榎川勝也、中村恵、井上清治、山崎玲子
デザイン・製作: 榎ポイントライン